

淨嚴の一座行法理解について

——『別行次第秘記』を中心にして——

佐藤正伸

々な解釈がされている。

本論では、『別行次第秘記』(『秘記』と略す)に検討を加え、淨嚴が一座行法をどのように解釈しているかを探りたい。なお、淨嚴は江戸期の学匠で経軌為本の立場に立って従来の事に相に批判的な考証を加えた人物である。

二

淨嚴は『秘記』の中で

(4) 凡一座行法軌則。外ハ擬ニ大國迎客作法。内ハ顯ニ修行転昇次第一。故得此意一可見ニ法則始終一也。

をとる。別行立ては、十八道立に四無量心觀、勝願、金剛眼、召罪、摧罪、業消除、成菩提心の印明を組み込んだものである。組み込む印明の数によって五種、八種、十種等の別行立てがある。十八道立ての行法は、もともとインドの迎客の作法を取り入れたものといわれるが、密教に取り入れられてから様

と述べる。すなわち、一座行法は、外面的には迎客の作法の形をとっているが、それはまた修行転昇の次第でもあるとす。今日伝わる伝授録の多くは、行法の作法を述べるだけであったり、それを単に本尊を迎えて供養することのみ理解しているものが少なくない。このなかにおいて『秘記』は一

座行法を修行の転昇次第ととらえる点に特徴がある。この点を中心に検討を加えることにする。

『秘記』は一座行法を修行の転昇次第と見るので、行法次第の項目に菩薩の階位である十地を配当する。すなわち、金剛眼を初地⁽⁵⁾、召罪を二地から七地、摧罪を八地、業障除を九地、成菩提を十地に配し⁽⁶⁾、小金剛輪を等覺に配当する⁽⁷⁾。但し淨嚴はこの説を浅略としている。

一座行法を修行の転昇次第ととらえ十地を配する考え方の一端は、すでに『無量寿軌』に伺える。例えば『無量寿軌』の闍伽の所には、

由⁽⁸⁾闍伽香水供養。令⁽⁹⁾修行者三業清淨。洗⁽¹⁰⁾除一切煩惱罪垢。從⁽¹¹⁾勝解行地。至⁽¹²⁾十地及如來地。當⁽¹³⁾証⁽¹⁴⁾如是地波羅蜜時。得⁽¹⁵⁾二切如來甘露水。受⁽¹⁶⁾与灌頂。

とある。また、華座の所には

由⁽¹⁷⁾結蓮華座印。誦⁽¹⁸⁾真言。加持。行者獲⁽¹⁹⁾得十地滿足。當⁽²⁰⁾得⁽²¹⁾金剛座。

とある。華座は、本尊を迎えてのち本尊に座を献ずる印明である。『無量寿軌』はこの華座を献ずることによって行者が十地を獲得し金剛座を得るとする。このことより『無量寿軌』には修法を修行の転昇次第ととらえている部分があることがわかる。ただ、『秘記』は十地を満足するのを成菩提心と解釈するので『無量寿軌』の説とは相違していることがわ

かる。また、『無量寿軌』の中にも矛盾点がある。例えば、被甲護身の所ですでに、「疾証無上菩提。」と記すのに、闍伽や華座の所で十地の事が出てくる。このあたりの矛盾点は古来にも問題になったらしく、道範は『行法肝要抄』の中で祖師先德存⁽²²⁾此用意。故於⁽²³⁾二座行儀⁽²⁴⁾已究竟。未成仏等觀念相交也。

と述べる。すなわち一座行法の中には已究竟の部分と未成仏の部分とが相い交って使われているというのである。

一座行法はもともとインドの迎客の法によって構成されたものである。それに仏教的な意味付けをするうちに異説や矛盾が生じたのであろう。なお、一座行法の中に十地を配する異説は我宝の『駄都秘訣鈔』や興然の『金剛界鈔』等の中にも認められる。

三

この他にも、『秘記』には一座行法を修行の転昇次第とみる解釈が多数認められる。例えば行法の区分法の中にもそれが見られる。『秘記』は一座行法を身器清淨分、敬礼奉持分、祈願所求分、懺悔発願分、結果道場分、修行種因海分、成就果海分、供養礼賛分に区分する。この区分法は修行種因海分、成就果海分の言葉からも分かるように修行の転昇次第に主眼をおいた区分法である。一座行法を区分したものと

有名なものに十八道次第を六法に分類した、十八・六法がある。先に述べた如く十八・六法には一座行法を修行の転昇次第ととらえる考え方は認められない。したがって、『秘記』が用いる区分法と十八・六法の区分法とは発想が異なっていることが分かる。

『秘記』と類似する区分法は『駄都秘決鈔』⁽¹⁹⁾に説かれている。『別行次第秘記』は、『駄都秘決鈔』を参照し、その中にも多数引用するが、一座行法の区分法や十地の配当説についてはこれを参照していない。

四

『秘記』は一座行法を修行転昇の次第ととらえるので、道場についても特徴的な解釈をする。『秘記』は道場について

⁽²⁰⁾行者平等智身土。法然所有心壇也。

と解釈する。また、行者が着する座についても、

⁽²¹⁾秘中深秘者。行者無相菩提心也。

と解釈する。すなわち、道場とは行者の自心を象徴的に表した心壇であるとし、行者が着す座は無相の菩提心を象徴的に表したものである。道場に入るとは自心の中に入ることと理解されよう。道場に入るについて『秘記』では

夫入道場則生在如来家。是初法明道也。除害障三昧。即金剛薩

埵三摩地。

としている。道場に入る時に、目にマタの二字を觀じそれが變じて日月となると觀想し、その日月を觀じた目で堂内を見渡すと、惡魔がことごとく退散し諸尊が堂中に充滿しているのを見るとする觀法（見仏）がある。これについても『秘記』は、

⁽²³⁾見仏則見自身座數。心仏本來嚴然。所礙隔執不能觀見。今以三日月大光。照破而二暗惑。本有心仏顯現分明。

と解釈する。すなわち、本来われわれの自心仏は嚴然としているが、仏と行者を別のものとする而二の暗惑によって自心仏は覆われて、それを觀見することができないという。したがって、マタ日月の光りによって而二の暗惑を取り除くと本有の心仏が顯現するのである。ここでは取り除くべきものが而二の惑とされ顯現するのが自心仏とされる。これと同じ解釈は結果においてもみられる。『秘記』は、地結・四方結・虛空網・火院・大三昧耶の五種結果について

⁽²⁴⁾是則以三平等本誓。退隔執毘那夜迦也。

とする。すなわち、結果とは軍荼利明王の三平等の本誓でもって、本尊と自分とが異なるとする而二の隔執を追い払う事であるとする。結果で追い払い毘那夜迦を而二の隔執と解釈する所が共通する。ここでも本尊はあくまでも自心とすることがわかる。

したがって、本尊を礼拝する壇前普礼についても『秘記』

は

(25) 問者自身即仏者。何強須敬礼耶。答礼自心中諸仏一也。而実能礼所礼共六大法界。非二而二。非一而一。

と記す。すなわち、もし自身が仏であるのならどうして本尊(仏)に対して敬礼するのかと問い、それに答えて本尊を礼拝するとはあくまでも自心中の諸仏を礼する事とする。そして本尊、行者ともに六大であるので行者と本尊は二にして二にあらず、一にして一にあらずとする。『秘記』は仏を自心中に求めることを非常に重視し徹底していることがわかる。

五

『秘記』は仏を自心中に求めるが、それでは勧請法において招く仏をどのように解釈しているのであろうか。『秘記』は師伝をあげて

(26) 所召請而來之本尊報身也(他受用身)也。浄土所住之身故。

とする。勧請法で招く仏は報身(他受用身)とする事が分かる。この解釈は多くの伝授録にも見られる一般的な解釈である。

ただ、『秘記』には自心仏との関係で勧請法を解釈する部分がある。その解釈は仏部心の部分に見られる。仏部心の印は両手を内縛にし両手の親指を並べ立て本尊を招く。『秘記』は仏部心の印について

(27) 二手内縛、八葉華藏界、浄土。又則凡夫八分肉団也。両掌双円性海。即今道場也。二大並立、鈎之者理智不二大空仏体也。鈎之者召請之義。以レ仏(自心仏)召レ仏(他方仏)

とする。すなわち、仏部心の印は、自心の肉団心、即ち道場の中に、二大指で表される自心仏をもって、他方仏を招くことを象徴的に表したものと解釈する。勧請法では他方仏を招くが、この場合も自心仏をもって、他方仏を自心内に招くと解釈する点に『秘記』の特徴的な解釈がある。

六

『秘記』は一座行法を、外面的には迎客の作法の形をとるとするが、それはまた修行転昇の次第であると解釈する。したがって、一座行法を単に本尊を迎えそれと一体なる次第と考えるだけでなく、徹底して自心仏を願して行く修行の次第ととらえている。

このように『秘記』には本尊(仏)を自らの心中に見出すうとする立場が強い。もちろん、自心を仏と見る考え方はすでに『大日経』をはじめ『秘藏記』等にも見られる。ただ、一座行法の中に具体的にこのことを見だしそれを徹底している点に『秘記』の特徴がある。またこの点にこそ浄土の行法次第の理解があるといえる。

1	大正78	115頁下『十八契印生起』
2	大村西崖	『密教発達志』
3	『別行次第秘記』	（八葉学会刊 明治44年）
4	『秘記』	57丁右
5	『秘記』	33丁左
6	『秘記』	39丁左
7	『秘記』	56丁左
8	大正19	70上
9	大正19	70中
10	大正19	68下
11	大正78	889上
12	『真言宗全書』	23巻
13	『真言宗全書』	24巻
14	『秘記』	24丁左
15	『秘記』	32丁左
16	『秘記』	56丁左
17	『秘記』	69丁左
18	『秘記』	98丁右
19	『真言宗全書』	23巻
20	『秘記』	3丁右
21	『秘記』	6丁右
22	『秘記』	3丁右
23	『秘記』	3丁左
24	『秘記』	60丁左
25	『秘記』	5丁右
26	『秘記』	40丁右
27	『秘記』	57丁左

〈キーワード〉 浄厳、『別行次第秘記』、十八道次第

（高野山大学講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目(3)

願生浄土 藤原正寿（大谷大学）

『御文章』にみる文章表現

徳永大信（九州龍谷短期大学）

親鸞の真仏観 松野純孝（上越教育大学）

真宗とカウンセリング―実存的接点としての聞―

増井 信（龍谷大学大学院修士）

節晃守簾と円通寺本正法眼藏

佐久間光昭（駒沢大学大学院修士）

中世曹洞宗における了庵派と石屋派の代語について

安藤嘉則（駒沢女子短期大学）

開目抄述作由来考―「自心の疑い」を中心として―

庵谷行亨（立正大学）